

その中で動作感覚を了解していく認識活動があること、その理解と認識活動とが身体運動を伴う領域での熟達化に重要な役割を果たしていることを明らかにしている。同時に、異なる文化社会的背景の中における階層的な環境要因の影響があることも示唆している。第6章では、音楽・芸術領域において卓越した技能を発揮する人々の体験の分析を通して熟達化を論じ、単なる機械的・操作的技術獲得のみならず、豊かな感性の表現をも包括した音楽・芸術的知識の追求の中で、活動それ自体の快体験から、目的を伴った充実感を伴う達成感へと変化することにより価値追求活動が志向されるという熟達化の過程を解明している。第7章では、高度な抽象的思考が求められる科学の領域における熟達化については、世界的評価を受けている受賞者を対象としてその体験を分析した。「なぜ」の問いを発する習慣形成から、追究してたどり着いた深い理解や創造性の発揮、自分にとっての対象の意味づけ、そして志向のトレーニングも含めた学習の蓄積、このような過程が熟達化の中で展開されている点を明らかにしている。第8章ではこれ等の領域における熟達化を総合的に論じ、熟達化の統合モデルの構築を試みている。その結果、「フロー体験」、「継続的専心」、及びその両者を結ぶ作用としての「志向性の発現」の3要因を熟達化の中心となる要因として析出している。

その熟達化の分析によって次の3点を導いている。第1に、熟達化は「フロー体験」と「継続的専心」及び、その両者をつなぐ「志向性の発現」の契機のバランスの中で成り立っており、いずれかが欠けた状態でも長期にわたる熟達化が成立し得ないことになる点である。第2に、「フロー体験」を単に情緒的な出来事として終わらせるのではなく、知的な対象理解に発展させることが求められる点である。驚きや感動がその場で終わるのではなく、疑問をふくらませ、なぜを問い、気づきを発展させ、探求的な活動に向かい、既存の知識を組換え新たな創造を果たすといった、「継続的専心」に結びつかなければならない点を確認している。第3に、こうした「フロー体験」と「継続的専心」とを結んで「志向性の発現」を促す役割を果たすものがコーチングであり、その「志向性」は「なぜの問い」（対象の認知性）、「わかる、納得する」（理解の操作性）、「できる有能感」（理解の遂行性）、「状況に応じた行動」（適応的実効性）、及び「独自のものをつくる」（創造性の発揮）といった形で発現することを明らかにしている。これを導くコーチングは、学びの場、状況全体を、学習者のより発展的な学びの認識へと結びつける上で重要な役割を担っているという。

以上をふまえ、第三部は、第9章から第12章までの中で、スポーツ、音楽・芸術、及び科学領域において優れた成果を残している指導者を対象とした研究を通して、具体的なコーチングを論じている。第9章では、第1節から第5節において、指導にあたった選手・チームに対して継続的に優れた競技成績を導き、優れた指導者として高く評価されている国内外のスポーツ指導者を対象としたインタビュー調査及び組織的行動観察を通して指導行動、指導意図及び指導観の分析

を試みている。その結果、選手の技能向上に向けての「技能及び成果の追求」、「自立化」及び「支援」の3要因からなるコーチング・メンタルモデルを提示している。第10章では、音楽・芸術領域において卓越した演奏家を継続的に育成しその指導を高く評価されている指導者を対象としたインタビュー調査及び行動観察を通してコーチング・メンタルモデルの構築を試みている。その結果、様々な関わりの中で技能の習得を目指す「技能向上」、学習者の自立的な意思の形成を意図した「意識形成」及び心的・物的環境設定としての「支援的環境設定」の3要因を構成要因として提示している。第11章では、優れた賞を受賞した生徒の指導に当たっている理数科系指導者を対象としたインタビュー調査及び行動観察から、「現象への接近」、「自由な探索行動」、及び「支援的環境設定」の3要因を科学領域におけるコーチング・メンタルモデルの構成要因として明らかにしている。そこでは、身近な現象に対する興味関心を掘り起こす場の設定や、とことん追究して思考する習慣形成が重要な役割を果たしているという。第12章では、第9章から第11章で得られた研究結果をふまえ、スポーツ、音楽・芸術、及び科学領域におけるコーチング・メンタルモデルの構築を行った結果、当該領域に求められる技能の習得と発揮を示す「技能向上」、学習者自ら問いを發しそれを探求する自立的な姿勢の習慣化を目指す「意識化」、及びそうした「技能向上」と「意識化」の働きかけをより効果的に機能させる「支援」により、学習者と指導者との良好な関係が構築され、学習者の学びの場が形成され、学習者が学びの状況の中で自らの意識化が引き出されていく関係を示している。

第四部では、第13章において、ここまでの結果をふまえ、熟達化モデルとコーチング・メンタルモデルとの関係を論じた上で、コーチング統合モデルの構築を行っている。熟達化モデルは、快体験、驚き、期待、有能感、親和感等で表現される「フロー体験」と、没頭、反復学習、ドリル、高度な課題設定、理解の深化等で表される「継続的専心」、及びそうした2要因の関係を深める契機となる「志向性の発現」によって構成されており、その3要素を有機的に統合する上で重要な役割を担っているのが、教育的関与としての「コーチング」であると位置づけている。

そして、コーチング・メンタルモデルでは「技能向上」、「意識化」、及び「支援」の3要素が相互に関わり合う形で構成されていることを明らかにし、コーチング統合モデルでは、最終的な目的としての学習者の卓越的技能育成と学習者の人間的成長に向けて、価値観の育成、指導・教示、心的支援、及び物的支援を展開し、技能の向上と共に学習者の自立を促すという指導行動をモデル化している。

論文審査の結果の要旨

「卓越的技能」を視野に入れたコーチングは、教育の可能性を論じる上で極めて重要なテーマでありながら、従来の研究では、主たる分析対象として取り上げられることはなかった。しかし本論文では、スポーツ、音楽・芸術、及び科学領域の卓越的技能に焦点を当て、体験の分析を通して熟達化過程を明らかにした。また、熟達化を最大限に果たす教育的関わりとしてのコーチングを検討し卓越的技能の育成におけるコーチング統合モデルを構築することによって、指導の在り方に対する新たな提案を行ったものである。

論文審査の結果、以下の点が指摘できる。

第1に卓越者の熟達化過程を質的に考察するという本論文の視点と方法論は独創的であり先駆的研究として評価できる。卓越的技能の熟達化について量的計測によって平均値を出すという方法ではなく、卓越的技能を発揮する人々がその卓越した技能を獲得するまでの体験を詳細に描写し、かつ卓越者へのインタビューと専門家との討議を経てその質的分析を行っている。その分析において一人ひとりの体験と認識論的枠組みの重要性を提起している点は、今後の熟達化研究における新たな視点と方法を提示したものとして意義がある。

第2に、コーチングを単に指導者の指導行動の視点から考究するのではなく、学習者の熟達化の視点も含めメンタルモデルをとりいれて論じていることが評価できる。それによって、体系性と実証性を伴ったコーチング統合モデルを作成しているが、このモデルは今後のコーチング研究に大きく寄与する貴重な提案であると言える。

第3に、スポーツ、音楽・芸術、及び科学の領域を研究対象として設定し、総合的に考察することで、より普遍的なモデルの構築を試みていることである。その意欲的な追究と同時に、世界的に著名な熟達者に関するデータを収集し、他の追随を許さないほどの貴重な資料の蓄積にも成功している。

他方、本論文はいくつかの課題を残している。

第1に異なる領域の熟達者が対象となり、かつ異文化の中での一人ひとりの体験が考察対象となっているが、その質的分析の方法論については困難な課題が残されている。かなり周到に先行研究をふまえてはいるものの、やはり難しい問題である。今後、さらにその質的分析の方法論を追究することによって、より精緻なモデルが構築できるよう期待したい。

第2に、熟達化過程において、時を忘れて没頭する“flow”体験と熟考して組み立てられた“deliberate practice”とがいかに大切な役割を果たしているかを証明しているが、論旨はややもすると時間で測定されるトレーニングに収斂しがちである。本論文が課題とする熟達化過程の質的分析にとつ

ては、そこで生じる「楽しさ」の質の吟味こそ重要ではないだろうか。その点曖昧さが残されており、今後、その「楽しさ」に関する仮説的な分類を構想すると同時に、より徹底した検証が望まれる。

第3に、卓越性を発揮する以前の人々や卓越性を発揮し得なかった人々に対して、本論文の成果がいかなる意味をもつのか、モデルの普遍的妥当性の問題と共に今後の重要な課題として残されている。

しかし、本論文を全体としてみれば、多領域にまたがり、また長期にわたる調査と分析作業を重ね、一つひとつの研究を着実に展開しており、卓越者育成の統合モデルを構築するという本論文のねらいはほぼ成功していると判断できる。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として合格と認める。